

平成19年度病害虫発生予報第7号

平成19年8月23日
鳥取県病害虫防除所

予報の概要 [参考]

区分	農作物名	病害虫名	発生時期	予想発生量	
普通作物	イネ	いもち病(穂いもち)	-	やや少ない	
		紋枯病	-	やや少ない	
		トビイロウンカ	-	やや多い	
		斑点米カメムシ類	-	平年並	
果樹	ダイズ	紫斑病	平年並	平年並	
		ハスモンヨトウ	平年並	やや少ない	
		カメムシ類	-	平年並	
野菜	ナシ	シンクイムシ類	平年並	やや多い~多い	
野菜	トマト、ミニトマト キャベツ、ブロッコリー イチゴ	ハスモンヨトウ	平年並	やや少ない	
		ネギ、ナガイモ	シロイチモジヨトウ	平年並	平年並

気象予報(抜粋)

1か月予報(8月18日~9月17日:8月17日、広島地方气象台発表)

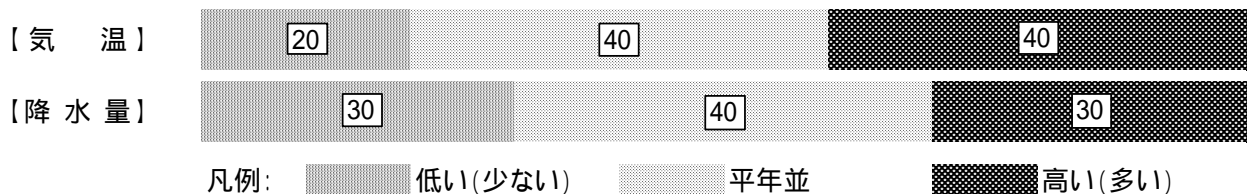
向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量などの確率は以下のとおりです。

平年と同様に晴れの日が多いですが、天気のごずつく時期があるでしょう。

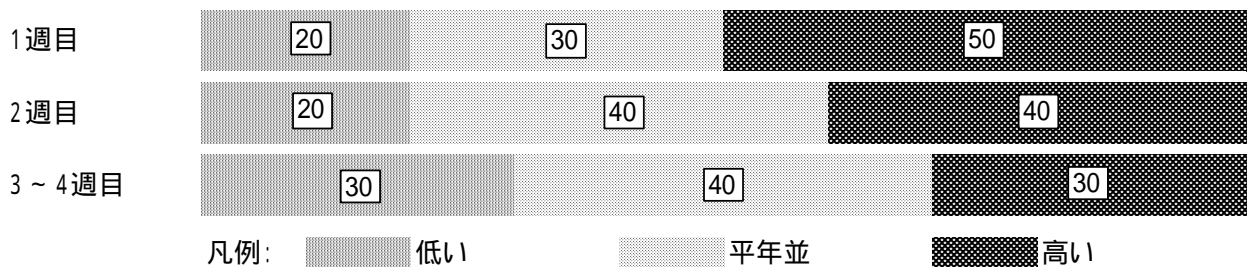
向こう1か月の気温は、平年並又は高い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は高い確率50%です。2週目は平年並又は高い確率ともに40%です。

<向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%)>



<気温経過の各階級の確率(%)>



普通作物

[イネ]

1 いもち病（穂いもち）

（1）予報の内容

発生地域 県下全域
発生量 やや少ない

（2）予報の根拠

ア 7月下旬における葉いもちの発生は、被害程度別調査における中発生以上のほ場割合が平年と比較してやや高かったものの、その後は、梅雨明け以降の好天により、一部の山間地を除き、葉いもちの発生は終息した。

イ 穂いもちの感染時期である出穂期以降も高温少雨で経過している。

（3）防除上注意すべき事項

中生品種、遅植などで出穂期～穂揃い期を迎えている地域では、出穂前後の防除を徹底する。

2 紋枯病

（1）予報の内容

発生地域 県下全域
発生量 やや少ない

（2）予報の根拠

ア 7月下旬現在、発生ほ場率は23.2%（平年：41.6%）で平年と比較して少ない発生となっている。

イ 8月21日現在、県予察ほ場における発生は少ない。

ウ 梅雨明け以降、本病の発生に好適な気象条件が続いている。また、向こう1か月の気象予報によると、本病の発生に好適である。

（3）防除上注意すべき事項

残暑などにより病勢進展が衰えず出穂後の防除が必要な時は、粉剤などにより追加防除を行う。

3 トビイロウンカ

（1）予報の内容

発生地域 県下全域（特に沿岸部）
発生量 やや多い

（2）予報の根拠

ア 8月第2半旬現在、予察灯への総誘殺数はやや多い。また、一部ほ場においても発生が確認されている。

イ 向こう1か月の気象予報によると、本虫の発生に好適である。

（3）防除上注意すべき事項

ア 現在、本中の発生は、ほ場間差が大きいため、各ほ場における生息密度及び発生予察情報などに注意する。

イ 8月下旬以降の要防除水準は、成幼虫数10頭/株である。要防除水準を超えているほ場は、防除指針などに従い防除を行う。

4 斑点米カメムシ類

（1）予報の内容

発生地域 県下全域
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 8月上旬現在、ほ場での発生は平年並である。また、農試の定点イネ科雑草地における発生も平年並となっている。
- イ 向こう1か月の気象予報によると、カメムシ類の水田への飛来及びイネへの加害活動に好適な条件となっている。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 穂揃い期～乳熟初期の基本防除を徹底する。その後も発生の多い場合には、7～10日間隔で1～2回の追加防除を行う。なお、防除は地域一斉で行うと効果が高い。
- イ 中生品種、遅植などで出穂期～穂揃い期を迎えている地域で、出穂20日前頃に水田周辺のイネ科雑草地、畦畔などの草刈りを行っていない場合には、穂揃い期～乳熟初期に草刈りを行い、直ちに薬剤による防除を行う。
- ウ 水田内で穂をつけたヒエ類は、カメムシ類の飛来を助長するので直ちに取り除く。
- エ 要防除水準は、捕虫網50回振りすくい取り調査で4頭以上である。

[ダイズ]

1 紫斑病

(1) 予報の内容

発生地域	県下全域
発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 大豆の開花期は平年並となっている。
- イ 向こう1か月の気象予報によると、本病の発生は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

防除に水和剤を用いる場合は、アミスター20フロアブルの3,000倍液に、カメムシ類の防除剤及び展着剤を加用し、開花期後25～30日に1回、150～300L/10aを散布する。粉剤を用いる場合は、マネージトレボン粉剤DLを開花期後25～30日に1回散布する。

2 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	やや少ない

(2) 予報の根拠

- ア ダイズほ場では、平年並の幼虫の発生が認められた。
- イ 8月第3半旬現在、フェロモントラップによる総誘殺数は平年に比較して少ない。しかし、8月第2半旬以降誘殺数が増加しているため、8月下旬頃から幼虫による被害が増加すると予想される。
- ウ 8月上旬現在、発生ほ場率は12.8%（平年：45.5%）と平年より少ない発生となっている。
- エ 向こう1か月の気象予報によると、本虫の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 若齢幼虫の加害によって発生する白変葉の早期発見に努め、発生初期の場合、葉の切除などによる捕殺を行うか、防除指針などを参考に防除を行う。
- イ 防除の目安は、1a当たりの白変葉か所数5か所以上とする。なお、新葉の出葉により、白変葉が確認されにくいほ場が多いので、観察に当たっては、ほ

場周辺からの観察のみならず、ほ場内での観察も行う。
ウ 若齢幼虫に対する防除薬剤の効果は高いが、齢期が進むと防除効果が劣るため防除適期を失しないようにする。

3 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月上旬現在、本ほではホソヘリカメムシ、イチモンジカメムシ、アオクサカメムシの発生がみられ、発生ほ場率は33.3%（平年：43.7%）と平年と比較してやや少ない発生となっている。

イ 8月第2半旬現在、予察灯における誘殺数は平年並となっている。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、本虫の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 近年、9月以降にカメムシ類の密度が急増する傾向がみられるので、今後の発生状況に十分に注意する。

イ 防除指針に従い、若莢期にあたる開花期後25～30日と、その10日後に薬剤を散布する。その後も発生が多い場合、幼虫の密度が再び増加する9月上中旬頃に追加防除を行う。

果 樹

【ナ シ】

1 シンクイムシ類（平成19年7月13日付、病虫害発生予察注意報第1号発表）

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 やや多い～多い

(2) 予報の根拠

ア 8月中旬現在、ナシ園設置（北栄町ほか3地点）のフェロモントラップにおけるシンクイムシ類の誘殺数は平年並～やや多い。

イ 平成18年度から開始した、県内5地点のフェロモントラップにおけるシンクイムシ類の誘殺数は、多発した前年より多い地点が認められている。

ウ 現地の一部のナシ園では、ナシヒメシンクイによる果実被害が認められている。

エ 向こう1か月の気象予報及びこれまでの発生経過から、ナシヒメシンクイの第3世代成虫（第4回成虫）の発生時期は平年並の8月中旬～9月上旬と見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 収穫前の防除を徹底する。特に、昨年被害が多かった地域では、本年も被害発生が懸念されるので注意する。

イ 薬剤は、アグロスリン水和剤2,000倍液などを散布する。なお、薬剤の散布に当たっては、農薬の使用基準を遵守する。

野 菜

[トマト、ミニトマト、キャベツ、ブロッコリー、イチゴ]

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並
発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

- ア 8月中旬現在、県予察ほ場（北栄町）におけるフェロモントラップでの雄成虫の誘殺数及び幼虫の食害量はやや少ない。
イ 現地ほ場におけるフェロモントラップでの誘殺数は、平年に比べ少ない。
ウ 向こう1か月の気象予報によると、今後やや少ない発生量が予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 薬剤の防除効果が高い若齢幼虫期のうちに防除を行う。ほ場内をよく観察し、発生や食害がみられた場合には直ちに防除を行う。
イ トマト及びミニトマトでは、若齢幼虫期にアタブロン乳剤2,000倍、マッチ乳剤3,000倍などを散布する。中～老齢幼虫が見られる場合には、プレオフロアブル1,000倍などを散布する。
ウ キャベツでは、若齢幼虫期にアタブロン乳剤2,000倍、ノーモルト乳剤2,000倍などを散布する。中～老齢幼虫が見られる場合にはアフーム乳剤1,000～2,000倍、マトリックフロアブル2,000倍、プレオフロアブル1,000倍、トルネードフロアブル2,000倍などを散布する。
エ ブロッコリーでは、プレオフロアブル1,000倍、カスケード乳剤4,000倍などを散布する。
オ イチゴでは、若齢幼虫期にアタブロン乳剤2,000倍、ラーベインフロアブル1,000倍などを散布する。中～老齢幼虫が見られる場合には、アフーム乳剤2,000倍、トルネードフロアブル2,000倍などを散布する。

[ネギ、ナガイモ]

1 シロイチモジヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並
発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

- ア 8月中旬現在、県予察ほ場（北栄町）におけるフェロモントラップでの誘殺数は平年並である。
イ 一部の現地ネギほ場において、幼虫による被害が見られている。
ウ 向こう1か月の気象予報から、平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 幼虫が若齢の時期に防除を行う。これを逃すと防除が困難となる。
イ ネギでは、ランネート45DF1,000倍、ハチハチ乳剤1,000倍、アフーム乳剤1,000～2,000倍などを散布する。
ウ ナガイモでは、デルフィン顆粒水和剤1,000倍を5～7日間隔で2回程度防除を行う。なお、ムカゴについても同様の処理を行う。

[おしらせ]

農薬は、農林水産省の登録番号のあるものを、ラベルをよく読んで使いましょう。詳しい内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます。(<http://www.famic.go.jp/>)

**農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、
周辺への飛散には充分注意しましょう。**

< 鳥取県病害虫防除所ホームページ >

アドレス <http://www.jppn.ne.jp/tottori/>

病害虫の発生予察情報やフェロモントラップの調査結果(野菜の各種害虫、果樹のシクイムシ類)、病害虫の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

鳥取県病害虫防除所

〒680-1142 鳥取市橋本 260

TEL : 0857-53-1345、FAX : 0857-53-5647

E-mail : boujyot@titan.ocn.ne.jp

次回の予報発表は、9月5日(水)の予定です。